『あきらめるな』

ピカッ！ っと、雨雲におおわれた空が光り、そしてすぐに、ゴロゴロゴロ～ッと雷鳴がひびくようになったのは、それから少したってからのことでした。

ニッキは、そのカミナリの鳴り方で、理科の時間に習ったことを思い出していました。

たしか……。

ピカッ！ って光った後、ゴロゴロ～ッと鳴るのがおそければおそいほど。カミナリ様が遠くにいる、って先生が言ってたよなあ。

と、いうことは……。

と、いうことは！

大変です。降りしきる雨は、強くなるばかりだし、それになんていっても、ピカッの後すぐにゴロゴロ～ッと鳴ってきています。

「ということは、カミナリ様がぐんぐん近づいているってことだ！」

ニッキの頭の中に、カミナリ様に打たれて、三人がモーターボートごとまっ黒こげになっているヒサンな姿が浮かびました。よく、テレビのアニメに出てくる、アレです。

「あ～ん、お兄ちゃんったら。急に大声出さないでよ～！」

タニアが、モーターボートにしがみつくよ

作／寺田憲史　絵／松原徳弘（パステル）

うにして怒っています。
でも、その目には、なみだがいっぱいです。とても、カミナリ様と黒こげが近づいたことなど、……いえいえ、とにかくカミナリ様がせまっていることなど言えません。
な、なんとかしなくっちゃ！
ニッキは、夢中でボートのモーターにしがみつきました。
ボートの前方は、すでに深い霧でおおわれていましたが、かすかに右手のほうに小さく島が見えます。
多分、ヘッジホッグ湖のまん中に浮かぶ無人島のホッグホッグ島だと思います。そこには、お天気のいい日に何度も行ったことがあります。
ニッキは、ボートをその島に上陸させようと思いついたのです。
でも、
「あわわわわ〜っ！」
モーターのハンドルにふれたしゅん間、ニッキは思わず弾き飛ばされそうになりました。
それも、無理はありません。
ニッキは、時どきモーターボートのプラモを作ります。でも、このモーターボートのモーターといったら、そのモーターの百倍、いや二百倍以上も大きいものだったのです。
その振動ったら、すっごいものがあります。
「あわわわ〜、リリリリ・・・リリトト、ルルル、・・・ジョ、ジョンンン・・・。」
ニッキの歯は、モーターの振動のためにうまくかみ合いません。それでも、ニッキは、必死に親友のリトル・ジョンに助けを求めました。
でも、リトル・ジョンには、ニッキの声が聞こえていないようです。
大切なポップコーンが、雨でだいなしにならないように、必死にシャツの中に押し込んでいます。
「リリリ・・・トトトルル・・・ジョ、ジョジョ〜・・・。」
いよいよ、歯がかみ合いません。しまいには耳までかゆくなってくる始末です。
「リトリト・・ジョンジョン！」
そして、ニッキが、ほとんど犬を呼ぶみたいにリトル・ジョンを呼ぶと、やっと、このポップコーン大好き少年は、ニッキのほうに

はみだし情報ファイル
ニッキは、ヘッジホッグ・エレメンタリー・スクール（ヘッジホッグ小学校）に通う10歳の少年。ということは、なんと小学四年生だったんですネ〜！

振り返りました。

そして、必死！っという感じのニッキとはまったく正反対に、のんびりした感じで言ったのです。

「やぁ、心配してくれなくても大丈夫。ポップコーンなら、ほらこうやってシャツの中にかくしたから。」

「なっ……。」

ニッキは、あんぐりと開いた口がふさがらなくなりました。

そして次のしゅん間、一部始終を見ていたタニアが、たまりかねてリトル・ジョンにヘッドロックを決めていました。

「ううううう〜、タ、タニア。た、助けて〜。」

「助けてほしいのはこっちのほうよ！ さっきからお兄ちゃんが、手伝ってって言ってるでしょ！」

タニアは、一しゅん、ボートの大揺れのことなど忘れてしまったようです。

「うりうりうり〜！」お父さんに習った必殺技でリトル・ジョンをしめあげました。

「わかった！ わかったってばぁ〜！」

リトル・ジョンは、悲鳴をあげてモーターのハンドルにしがみ付きました。

でもその時、ゴキッ！

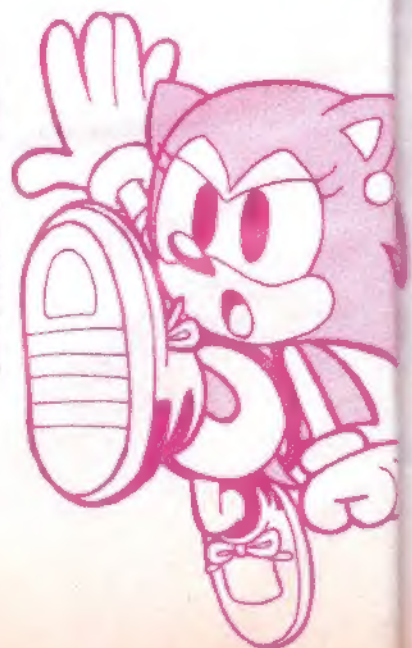
ニッキの倍近くも体重のあるリトル・ジョンは、勢いあまってモーターのハンドルを折ってしまったのです。

「ひぇ〜！」

と、ほとんどゼツボー的な悲鳴をあげたのは、リトル・ジョンだけではありません。

ニッキも。

タニアも。

目が点になって、立ちつくしました。

でも、そのまま目を点にしてボ〜っとしているわけにもいきません。

なにしろ、支えていたハンドルがなくなったために、モーターボートがぐるぐる回り出して、一向に前に進まなくなってしまったのですから。

なんとかしなくっちゃ！

なんとか！

ニッキは、またすぐにこの危機を抜け出す方法を考えはじめました。

なんとかしようとする！ ということは、ニッキの大好きなお父さんが、いつも口ぐせのように言う言葉です。

つまり、困ったことがあったり、うまくいかないことがあったりしても、すぐにあきらめないで工夫する、というのがお父さんの考えです。

「よ〜し！」

ニッキは、頭の中でお父さんの顔が浮かぶと、それにはげまされたように、すぐにいい方法を思いつきました。

「リトル・ジョン！ とにかく、キミはモーターが動かないようにぎゅっとつかんでて。」

「アイアイサー！」
リトル・ジョンが、ボーイスカウトでやるような敬礼をして、モーターをかかえ込みました。
回転していたボートが、一方に走り出します。
「よし！」
ニッキは、にっこりとうなずくと、今度はタニアの持ってきたスケボーの先を波立つ水面に突っ込んだのです。
「お兄ちゃん、一体何するつもり？」
「スケボーの先を舵にするんだ。ほら、なんとかホッグホッグ島に向かってるぞ。」
ボートから身を乗り出して、スケボーの先を舵にするのはかんたんなことではありません。水の抵抗が、すごいからです。
でも、ニッキは、歯をくいしばってがんばりました。
ところが、ホッグホッグ島が、だいぶ近づいてきた時、大変なことが起きたのです。

ドゴ～ン！
はじめ、船底でそんな音がしたかと思うと、次のしゅん間、ニッキたちは、ボ～ンと空中に飛ばされてしまいました。
「キャアアア～！」
ニッキは、タニアの悲鳴を遠くのほうで聞いたような気がしました。
でもすぐに、それもはっきりしたものではなくなり、ちょうど眠りに落ちていく時のように、まっ暗な世界に引き込まれていってしまったのでした。

ハチのチャーミー・ビー

ブ～ン・・・ブ～ン・・・。
ニッキは、暗やみの中でやかましいハエの音を聞いていました。
そのハエの音に、こんな声まで混じっています。
「なによ、この子。お腹が痛いっていうから、診てあげようとしてるのに。」
これは、妹のタニアの声です。
「ははっ、きっとトゲかなんかが刺さっちゃったんじゃないのかな？」
この声もよく知っています。ついでに、シャキ！　ポップコーンをほおばる音も聞こえます。
「まっさか～！　ハチが、トゲに刺さるなんて、おっかしくなぁ～い？」
ハチ？
ニッキは、急に頭の中がはっきりしていく感じに包まれていきました。
ハチって……？
ニッキは、思わず目を開けて言いました。
「さっきから、ブ～ンブ～ンってうるさいのは、ハエじゃないのかい？」
「あ、お兄ちゃん！」
「ニッキ、そ、それ言うとマズイよ。」
タニアとリトル・ジョンが、あわててニッキの口をふさごうとしました。
でも、それはおそすぎました。

はみだし情報ファイル　ニッキは４人家族だ。お父さんのポーリーとお母さんのブレンダ、そしておなじみ妹のタニア。男の子みたいに元気なタニアは７歳なんだ。

ハエ、ではなく、一匹の威勢のいいハチが、
「よくも、オレっちのこと、ハエと一緒にしやがったな～！　ブヒ～ン！」
と、カンカンになってニッキにおそいかかってきたのでした。
「うわ～！」
ニッキが、そう叫んで身をかわす間もなく、ブスッ！　ハチのハリがニッキの鼻の頭に命中していました。
たちまち、鼻の頭がブワ～ンと情けなくふくれ上がります。
「いったぁ～！」
気が付いてみれば、タニアもリトル・ジョンもどこかしら刺されています。
きっとこのほこり高いハチを、ハエ呼ばわりしたために刺されたに決まってます。
「フン！　思いしったか。」
ハチは、金色に輝く体をほこらしげに空中で一回転させると、
「オレっちの名は、……超スピードに命をかけたハチの中のハチ！　へ～イ、チャーミー・ビー！と呼んでくれ。」
そう言って、パチッ！　指（？）を鳴らしてカッコをつけてみせたのでした。
あたぁ～……！
気を取りもどしたばかりのニッキには、ちょっとすぐにはこの超威勢のいいハエ、……じゃなかったハチのことをあれこれ考えている余裕はありません。

はみだし情報ファイル
物語の舞台になるのはヘッジホッグ・タウンだ。町の中央には路面電車（サンフランシスコの有名なケーブルカーみたいなの）が走っているんだよ。

ニッキは、一人でカッコをつけているハチにかまうのをやめて、あたりを見回しました。とにかくは、三人が三人、助かったことはたしかのようです。

そこは、ホッグホッグ島の小さな入江で、洞穴のようになっているところでした。たぶん、岩に乗り上げて転ぷくしてしまったモーターボートも、逆さまになったまま穴の入り口の大きな岩の上に引っかかっています。

外では、相変わらずピカッ！とゴロゴロがくり返されていましたが、それでも、ニッキは少しほっとしました。

やっぱり。

パパが言ったように、あきらめないでガンバッて良かった！

それにしても……。

それにしても、ブ～ン！ブンブ～ン！ブン、ブルル～ン！うるさいハチです。

チャーミー・ビーとか言ってカッコつけてみせたハチは、お腹をかかえてうんうん、というよりブンブンとうなっているではありませんか。

「どうしたんだい、このハチ？」

と、ニッキ。

「それがね、さっきからお腹が痛いってわめいているの。だからね、なんかヘンなもの食べたんじゃないの？って言ったんだけど。」

「うるへ～！うるへうるへ～！このチャーミー・ビー様が、ヘンなモン食うなんて意地きたないこと、するわけないっしょ、するわけ！」

「だから、ボクは、なんかのトゲに刺さったんじゃないかって……。」

「うるへうるへ～！このポップコーン野郎が！超スピードが売りモンのオレっちが、そんなドジふむわけないだろ。ったく、ったくたくよ～！」

チャーミー・ビーは、またまたカッコつけて指（？）をペシペシ鳴らしていらついてみせました。

でも、その時、お腹の部分に急にあったかいものがふれました。

「あん？」

気づくと、いつの間にかニッキが人差し指を伸ばして、自分のお腹に当てています。

「あん？い、いったい、な、なにするつもりだよ？」

チャーミー・ビーは、ちょっとあわてて言いました。

「お腹の痛い時は、あっためるのが一番。……ほら、タニア、ママがいつも言ってるだろ？」

チャーミー・ビーは、お腹の痛みがたちまちなくなっていくことに、驚きました。

でも、それ以上に驚いたことがあります。

それは、火以外にも、こんなにあったかいものがあったということです。こんな、というのは、もちろん今自分のお腹に押し付けら

れているニッキの指のこと。

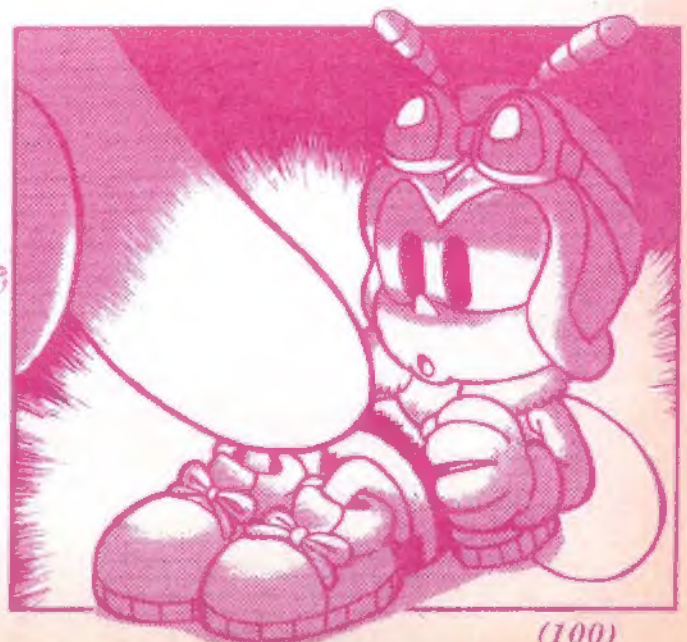
チャーミー・ビーは、生まれてからず～っと一人で生きてきたハチ。だから、自分以外の生き物にこんなあったかい体温があることを知らなかったのです。

「おい……。」

チャーミー・ビーは、ちょっとてれながら、ニッキの顔をのぞき込んで言いました。

「オレっちのこと、これからチャミーって呼んでくんな。」

それが、ニッキとチャミーとの出会いでした。

ところが、この出会い、実は大変な事件に巻き込まれてしまうことになる、はじまりはじまり～っ！でもあったのです。

巨大な影がせまる

それからチャミーは、助けてくれたお礼だと言って、ニッキたちを、洞くつの奥へ奥へと案内しました。

そしてそこにはなんと、盛りだくさんのお菓子、そしてそして、それに負けないくらいの量のオモチャが山とかくされていたのです。

「す、すごいや！　ま、まるで、ここは宝島みたいじゃないか！」

ニッキたちは、思わず大きな声をあげました。ところが、

「だれだ〜っ！」

地ひびきのような声が、こだまして、岩穴の天井にも届く巨大な影が近づいてきたのです。

その男は、手に火をともしたランプを持っています。その火に、男の毒どくしい肌の色と、それに、岩のようなイボが浮かび上がりました。

「ヒック！」

ニッキは、怖いテレビを見た時など、きまってしゃっくりをしてしまうのがクセです。

そのニッキの口を、タニアとリトル・ジョンがあわててふさぐようにして、岩かげにかくれました。

男の影は、たちまち三人の上に大きく広がっていきました。

つづく

せまる影の正体は？　そして、四人（？）の運命は…？